

「死」の意味と「生」の価値 横断型基幹科学技術は どのようにかわるか

横断型基幹科学技術 遠藤 薫*



■「生」の終わり

最近、身近で訃報を聞くことが増えた。

それも高齢化社会の一つの側面なのか。

死者を弔う儀礼のなかにも、社会の様相が映し出される。

たとえば、近年では、訃報に当たり前のよう「葬儀は近親者のみでとりおこないますので、供物やお香典は遠慮させていただきます」という言葉が添えられている。かつてのように、盛大な葬儀や参列者の数その人物の「生きてきた証」であるとは、必ずしも人々は考えなくなった。

同じように、永眠の形についての考え方も変わってきている。「家」の墓地に埋葬されるのではなく、「散骨」や「樹木葬」といった形式を望む人も珍しくなくなった。今日では、「生」の終え方にも個人化が進んでいるといえるかもしれない。

■「死」と社会

だからといって、現代人が「無縁死」や「孤独死」を望んでいるわけではない。

いや、そもそも、「必ず死ぬと定められながら現在を生きている」という不条理な存在である人間にとって、「死」にむかう「生」の苦悩や恐怖を補償するのが「社会」であるといっても過言ではない。

このような事情を、ジョルジュ・バタイユは次のように表現している:「ひとは孤りで死ぬのではない。そして、死に行く者の隣人であることが人間にとってこれほどまでに必要なのは、どのようなささいな私たちではあれ、互いに役割を分かち合い、死にながらも現在に死ぬことの不可能性につきあっている者を、禁止のなかでも最も優しい禁止

によって、その傾斜の上に引き止めるためである。今、死んではいけない、死ぬことに今などあってはならない。『いけない』という最後のことば、たちまち嘆願へと変わってしまう禁止のことば、口ごもる否定辞、いけない きみは死んでしまう(『彼方への歩み』)。

同じように、ジャン＝リュック・ナンシーは、次のようにいう:「共同体は、不死のあるいは死を超えた上位の生の絆を、諸主体間に織りあげるものではない……。その成立からして共同体とは……。おそらくは間違っただけで呼ばれている人々の死に向けて秩序づけられたものである」。

「社会」の究極的な存在理由は、「死」に意味を与えることによって「生」を価値づけることにある。

■医療技術の進歩と社会的疎外

だが、現代社会は異なる方向をめざしてきたのかもしれない。「死」という、この望ましからざるものを覆い隠し排除し、能うかぎり自分から遠ざけることによって、死を考へるのを避けて通ろうとすることは可能である。死に関するこのような傾向が現代の発達した社会においては特に著しい」と社会思想家のノルベルト・エリアスは著書『死にゆく者の孤独』で指摘する。

近代科学は、「病」や「死」を最小化するという方向で、大きな成果を上げてきた。死亡率は減少し、平均寿命は大幅に延長されてきた。都市も建築も、ひたすらに「若さ」を謳歌し、「死」や「老」の影は可能な限り消し去られている。医療技術はますます高度化し、「再生医療」という究極の技術も現実となりつつある。私たちは「不老不死」の世界を手に入れようとしているのだろうか。それは可能なのか。それは幸福をもたらすか。

*学習院大学法学部 教授

その一方で、「社会の高齢化」や「医療費の増大」が社会病理として語られる現実もある。高齢者を、あたかも、社会の「負担」や「リスク」であるかのように語る人もいる。

「ともすれば、体が弱いということだけで、高齢者は他の人々と隔てられてしまいがちだ。肉体の衰えが老人たちを孤立させるのである。…老人や死を迎えつつある人々が活動的な共同体から暗黙のうちに隔離されてしまうこと、好意を寄せている人々と永年にわたって築いてきた親密な間柄が徐々に冷却してゆき、大切な人、安心感を与えてくれる人たちの全部から遠く離れてしまうこと。何が辛いといって、これほど辛いことはないのである」(前掲書)とエリアスはいう。

■「死」とともにある「生」 横幹技術のなすべきこと

問題の核心は、現代文化における、生と死の単純な分離、老いの疎外にある。そもそも、人間の社会形成の過程は、先にも述べたように、「人間存在」の不可思議さ、そのパラドックスそのものに基盤をおいていると考えられる。したがって、このパラ

ドックスを含んだかたちで、あらためて人間の生(死や老いや病を含めて)の全体を、社会的文化的に再構成する必要があると思われるのである。

それは同時に、加齢現象もあえて忌避せず、社会を織りなす多様性の一つとして組み込んでいくことでもあるだろう。都市空間や生活環境のユニバーサル・デザインはもちろん、例えば、バーチャル・リアリティ技術や、インターネットなどをいかに生活に役立てるかといったこともますます重要性をますますだろう。WHOは2011年に高齢者に優しい都市(Age-Friendly Cities)のグローバル・ネットワークを上げた。

このような利用技術が進んではじめて、生命科学や情報科学をはじめとする近代科学技術の発展を「進歩」とよぶことができるだろう。そのとき私たちの「社会」も再生される。

東日本大震災という大きな哀しみを経験したわれわれには、まさに、文理を超えた思想と技術横断型基幹科学技術によって、「死」を抱いた「生」の場所を「生」と「死」を横断する社会空間をデザインすることが求められているのである。